

2024 12

ナイル

現代短歌ナイル

ナイルキャンパス／五代目神田伯梅

芙貴子ワールド／松本芙貴子

偶然の糸を遊ぶ【6】

10月号作品批評／宮本史一（心の花）

高校生短歌特集【3】



NILE CAMPUS

306

伯梅閑話 —— 四十代はおばあさん ——

小村井敏子（五代目神田伯梅）

二〇二四年初めのNHKの朝ドラは、ブギの女王として一世を風靡した歌手、笠置シズ子の生涯だった。彼女は、四十二歳で歌手を引退した。今の感覚では、「まだ若い」だが、あの当時の感覚は違う。新聞に「殺されたのは、五十いくつの老婆」というような記述があったものだ。歌の中では、「今年六十のおじいさん」が櫓を漕ぐのだ。

太平洋戦争の終戦直後からいつごろまでだったろう。四十代が「おばあさん」と思われていたのは、「人生五十年」が、実感としてあった時代だ。出産で亡くなる女性が多かったし、戦死した若者が大勢いた時代だ。男性の定年退職が、五十代だったと記憶する。女性は、婚姻の対象、職場の花として採用されていた時代。三十代で退職に追い込まれたと聞く。その年齢で退職すれば、親兄弟か、男性に頼らなければ生きられない、女性の貧困が待っていた。

終戦直後に結婚した私の母は、四十代だった姑をおばあさんだと思ったと言っていた。今なら、四十代での出産を誰も不思議に思わないが、栄養状態も違う時代だ。笠置シズ子のようにステージいっぱい飛び跳ねるような体の動きは難しくなっていたことだろう。笠置シズ子が引退を決めた四十代は、今なら七十代以上の感覚だったのではないだろうか。

伯龍と千代は、三十六年六か月（と、伯龍は言っていた）を添い遂げた。千代夫人は、八十歳で亡くなっている。そのときまで、上品な美人だった。伯龍と夫婦になったとき、四十三歳か。すると伯龍は、二十六歳か。千代夫人と夫婦である確認は、亡くなる年まで欠かさなかったようで、それを伯龍は自慢していた。が、彼女の肌を手を触れることはなかったに違いない。それは、私に対してもそうだったから確かだ。大切な人に無礼を働くことはできなかったのだと思っている。妻を一人の人間として大切にしている伯龍だった。